

日本語の敬語再・再考：役割アイデンティティの観点から

尾 鼻 靖 子

I はじめに

本稿では、日本語の敬語の根本はどのような性質のものなのか、そして敬語を語用論上どのように捉えるべきかについて論じる。これらを明らかにするために理論の背景としてシンボリック相互作用理論 (Symbolic Interactionism: 以下 SI と略す) における役割アイデンティティ (role-identity) を適用する。この理論は社会心理学で社会と個人の間を分析する役割理論のひとつであるが、SI によれば、我々は日常、他者とのインターアクションにおいて、自分が置かれている場面・状況を把握して相手にどのようにふるまうのかを決定し (identity)、それに基づいた役割を演じる (role-performance) という行動を取るという。同じように、敬語もそういう行動のひとつであるというのが本稿の主旨である。そして、その identity は社会規範に基づくこともあれば、個人の心理を表すこともあり、敬語もそれに応じて使用・不使用が決定され、異なる機能を呈するのである。

敬語は Brown & Levinson (1978, 1987) がネガティブ・ポライトネスのストラテジーであると論じて以来、様々な論争を経てきた。まず Ide (1989), Matsumoto (1988) らは、敬語は意志選択できる (volitional) ストラテジーではなく、社会規範であり使用義務が課された言語体系であると反駁した。しかし一方、Brown & Levinson を支持する立場も現れた (Fukuda & Asato, 2004; 熊井, 2009; 森山, 2010; Pizziconi, 2003, 2011; 滝浦, 2005, 2008; 宇佐美, 2001 など)。次に、Eelen (2001) をはじめとして Watts (2003) や Mills (2003)、Locher & Watts (2005) らが、ポライトネスは、定式のルールとして捉えるのではなく、発話が表れたコンテキストを細かく調べることで決定されるべきものであるという discursive approach を唱えてからは、敬語も広範囲にディスコースのレベルで捉えるべきだとし、その結果、Ide らの敬語の捉え方は狭義的であり、敬語を静止的に捉えており現実的でないとする主張が多く出た。反論の多くはいわゆるスピーチレベルシフトという同じディスコース内で同じ話者が敬語を使ったり使わなかったりする現象を証拠として提示し、敬語はダイナミックに変化し、様々な語用論的意味をもたらすと主張している (Barke, 2011; Cook, 1996a, b, 1997, 2008, 2011; Geyer, 2008; Ikuta, 1983; Ishizaki, 2000; Jones & Ono, 2008; Makino, 2002; Maynard, 2001, 2004; Okamoto, 1999, 2009; Saito, 2010 など)。

以上のように敬語について様々な論議がなされてきたのであるが、果たして敬語をどのように捉えるべきかという疑問はまだ残っているように思われる。本稿では理論背景として SI を適用して、次の三項目に焦点をあてて論じていく。

- (1) 敬語はストラテジーなのかどうか。
- (2) 敬語使用・不使用条件の根本は何なのか。
- (3) 従来の社会的関係を示す敬意表現としての「敬語」は、スピーチレベルシフトに見られる「敬語」とは異なる質のものとして扱うべきかどうか。

II 先行研究

1. Ide (1989), Matsumoto (1988)

Brown & Levinson (1978, 1987: 以下 B & L) は、敬語をネガティブ・ストラテジーと分類したが、それに対して敬語は、英語に見られるような意思選択ができるストラテジーではなく、社会規範 (social norms) に沿って義務的に使用する言語体系であると、B & L のストラテジーを volition と呼び、敬語は「わきまえ」であると主張したのは Ide (1989) である。さらに、Matsumoto (1988) は、B & L の face の概念が個人主義的であるのに対して、日本の社会はむしろ集団主義に基づいており、それは日本語の敬語の使用にも具現化されていると述べた。つまり、敬語は社会的に制度化された規範に基づいた現象であって、FTA (Face Threatening Act) を避けるために個々が選択するストラテジーではないと主張している。

まず、上記の論議においてキーワードとなる「わきまえ」と「社会規範」という用語に注目してみたい。「わきまえ」を discernment として Ide は使用しているが、この用語の意味は「物事の道理や区別を心得ている」という日常よく聞かれる言葉である。しかし、果たしてこれが「ストラテジー」と対照的な存在として成立するだろうか。なぜなら B & L のストラテジーの例も、「わきまえ」を提示していると思われるからである (Pizziconi, 2011: 65)。例えば、誰かに親切にしてもらったら「ありがとう」を言う、依頼するときには間接的に頼み直接的な命令などは避ける、などのストラテジーは、発話者が各場面で適格に状況を把握し、それを言語で表現したものである。つまり、これは「わきまえ」の表現に他ならない。そうすると、英語のポライトネス・ストラテジーも、自由意思 (volition) で選択した結果としての言語活動であるとは言えないのではないか。B & L が挙げているストラテジーの例はいずれも予測できるものであり、社会的に期待され共有されている類のものである。丁寧度の差で選択の余地 (例: will you, would you, could you という選択肢) はある程度認められても、それが敬語と対照的に存在する volition とは言えないし、敬語も形式の選択肢は同じように存在する。また、「わきまえ」という用語は決して Ide の言う「義務」や「制度化」と同義ではなく、その場にふさわしい行動であると判断

することであって、柔軟性も必要であり、変化する要素も十分含まれているのである。つまり、polite かどうかという判断基準はある程度社会的に共有されているとはいえ、それが即「義務」や「制度化」につながるわけではなく、場面や状況が多分にからむ適応性も兼ね合わせているのである。

次に「社会的規範」という言葉を検討してみたい。social norms という概念は社会学で多くの定義、論争がある概念であるが、それに対して語用論の世界では何の定義も与えず、あるいは社会学分野から最適だろうと判断した定義を紹介することもなく使用しているのである。Ide が、敬語を「制度化された」「義務的」と描写したために、同記述内に使用された social norms が同じようなものと受け取られたようで、後にスピーチレベルシフトを研究している Cook (2011) や Saito (2010) などは、Ide の捉える敬語は「静止的」(static) な social norms として言及している。ところが、社会学では、social norms は「動的」(社会心理学会(編)『社会心理学事典』, p.302) であり、社会で共有の期待 (shared expectations) を持ちながらも、状況依存性 (contingency) をも備え持ち (Bicchieri, 2006: 12)、「現実というよりはお互いにこのようにふるまうであろうという確信の上に成り立っている」(Bicchieri, 2006: pp.22~23 筆者訳) と把握されている。そこには「制度化された義務」という言葉も「静止的」という描写もない。Baurmann et al. (2010: 9) によれば、社会的規範は、外部から強制的に強いられるものではなく、所属社会 (ある一定のグループ内のこともある) の構成員で創造され共有する informal social order であるという。

以上をまとめると、「わきまえ」は敬語をストラテジーと区別する基準にはならないということになる。どちらも社会的共有性を持ち同時に状況依存性を備えている social norms だからである。では、敬語は B & L のポライトネス・ストラテジーの範疇に入るのだろうか。そうであれば、敬語はネガティブ・ストラテジーのひとつなのであるか。

2. 敬語とストラテジー、FTA の関係

Pizziconi (2003: p.1471) は『『わきまえ』はどの言語のコミュニケーションにおいても必要であり、敬語使用の原理は英語と同じくストラテジーとして規則化している」(筆者訳) と主張し、敬語は「ポジティブ・フェイス活動を生む」(ibid, 1594) としている。たとえば「よろしくお願ひします」¹⁾ という挨拶はこれから人間関係に関わっていきたいというポジティブ・ストラテジーであると論じている。さらに Pizziconi (2011) では、敬語もポライトネス・ストラテジーも社会的場面や人間関係、発話の状況を反映しており、それらの指標 (indexing) として機能している点において両者は変わらないと述べている。

1) Obana (2012b) は、この決まり文句を「立場」という役割言葉で分析し、ストラテジーかどうかは問わず、立場がお互いに認識できる条件が整えば、この決まり文句を発話できるとしている。この「立場」は SI の role-identity に匹敵する。

Pizziconi は Ide (1989) や Matsumoto (1988) に反論して「わきまえ」の普遍性を主張したのであるが、しかし、だからといって敬語が即ストラテジーの一部に組み込まれるというのは短絡的であろう。敬語（ここでは敬意の敬語）も B & L のストラテジーもポライトネスを目的としている点は変わらないのであるから、それらが現れる背景的条件に共通の要素があるのは当然である。それを踏まえた上で、さらに敬語とストラテジーとの間に異なる点があるのかどうかを調べる必要がある。

敬語をネガティブ・ストラテジーとみなした B & L に賛同しているのが、Fukuda & Asato (2004), 滝浦 (2005, 2008) である。彼らの主張に共通している点は、敬語の使用によって距離を取ることで相手の領域への侵害を回避するので、それはネガティブ・ストラテジーのひとつであるという点である。森山 (2010) も、聞き手敬語に限定しているが滝浦 (2005, 2008) と同意見で、聞き手を遠い存在として位置付けることによってネガティブ・ストラテジーを表現していると論じている。

敬語は確かに距離を置く機能があるが、それを即ネガティブ・ストラテジーと判断するのは問題がある。なぜなら敬語と B & L の唱えるストラテジーには成り立ちにおいて根本的な違いがあるからである。即ち、敬語はストラテジーを用いて構築された発話を文法的に転換させたものであって、敬意の敬語を含む発話は二重構造を呈しているのである。図 1 が示すのは、三種のストラテジーで構築した発話 (1) とそれを敬語化した発話 (2) であるが、この両者間における発話の意味（相手に伝えようとする意図）そのものは変化していない。

図 1

(1) 土曜日、よかったらパーティに来ない？
 〈ストラテジー〉 1 2 3

↓ 敬語化（文法的変換）

(2) 土曜日、よろしかったら、パーティにいらっしゃいませんか？

B & L の唱えるストラテジーは、発話の内容が相手にどのような影響をもたらすのかという点に焦点をあてて、その内容に応じて face を脅かさない手段として扱っているが、敬語という言語形式は発話の内容に直接関わらず、話し手が相手に対して取る社会的あるいは心理的距離を示す指標なのである。つまり、B & L の主張するようなストラテジーの構築は発話 (1) の段階で達成しており（相手に勧誘するのを押し付けないうで、選択の余地を残すという「よかったら」「否定形」「疑問文」を使用するというストラテジー）、それをそのまま敬語化²⁾（文法転換）したものが発話 (2) である。だから、「発話の内容」

2) これは honorific marking とよく言われるが文法転換というほうが適格であろう。しかし、marking という言葉は「有標」という意味もあるので (1) を無標とすれば確かに (2) は有標である。

によって構築する B & L の戦略と、その場面に存する相手との距離を定める指標としての敬語とには、発源の因子に違いがあるといえる。

すると、敬語をネガティブ・戦略と定めるのは問題があるといえよう。単に「距離」を置くからという理由でネガティブ・戦略であると判断するのは、B & L の主張を正しく把握していないからである。ネガティブ・戦略とは、自分の発話の内容が相手の領域に侵入する結果を招くので（依頼は典型的な例）その侵害の度合いを緩和するために生み出すアプローチのことである。一方、敬語は、相手との社会関係を把握していることを言葉で証明しているのであって、敬語を使用することが「侵害の度合いを和らげる」（Fukada & Asato, 2004: 1997 筆者訳）のではない。だから、Matsumoto (1988: 409-410) が、敬語を「相手との人間関係を強調するもの」と主張したのは一理ある。

さらに敬語をネガティブ・戦略とすると矛盾も生み出す。例えば、「昇進おめでとうございます」という祝いの言葉は、戦略としてはポジティブであるが、敬語をネガティブ・戦略と捉えれば、ひとつの発話に相反する質の戦略が同時に存在することになる。ある一つの発話の内容がポジティブ・フェイスを脅かし、同時にネガティブ・フェイスも脅かすという現象はあり得ない。B & L の二種の戦略を単純に「キョリ」の問題として把握するとこのような矛盾が起こる。Pizziconi (2003) の主張に従えば、この祝いの言葉はポジティブ・戦略になるのであろうか。であれば、Pizziconi は、敬語自体に焦点をあててではなく、B & L のいう発話の内容によって判断していることになる。

「昇進おめでとうございます」という発話の内容はポジティブ・戦略である。祝いの言葉によって相手の成し遂げたことを認識し賞賛することで相手のポジティブ・フェイスを維持しているからである。一方同時に使用されている敬語は、社会的に距離がある（目上など）ということを相手に知らせる指標である。日本語の敬語には二層の言語活動があると認識すべきなのである。

Matsumoto (1988) が「今日は土曜日です」という発話には FTA がなく、敬語は戦略ではない、という主張に対して、敬語を使用しないことで FTA が生じるという反論がある（Fukada & Asato, 2004; 因, 2005）。それゆえに敬語使用が「デフォルトである」（因, 2005）、あるいは「守られて当たり前」（宇佐美, 2001）とも解釈されている。これらの主張にも問題があるように思われる。まず、敬語の使用不使用と FTA とは常に符合しない。Matsumoto (1988) が強調したのは、FTA が予想されなくとも敬語が現れる発話は存在するという点である。発話の内容が FTA を生じると予測してそれを避けるために戦略でもって FTA を緩和するという B & L の理論に対して、敬語の使用不使用は FTA の予測とは別のところにあるというのである。これは適切な指摘である。発話の内容に FTA が生じることがない発話でも、敬語を使用することもあり

(Matsumoto の上記の例以外でも多々ある。情報の伝達、相手の行動の描写など)、敬語を使うことで逆に FTA を生み出すことも状況によってはあり得るからである (例：銀行強盗が「現金をできる限りいただきますよう」と言えば、その内容が脅威であるがゆえに敬語の使用は一層の脅威を添えている)。また、対話に不在である第三者に対する「素材敬語」は、発話の内容の FTA に関係がなくとも現れる。これも聞き手と第三者に対して話し手がどのような社会的関係を認識したかという指標である。だから、敬語使用の決定と FTA 緩和とは常に符号するわけではないことが分かる。

さらに、敬語はデフォルトでもない。敬語を使用しない会社 (例：親戚関係で設立した小さな会社) も存在するし、下町の飲み屋では客に対して B & L のストラテジーは使っても敬語を使わないことで気軽な雰囲気を持つということもあるし、また目上と話していても全ての発話に敬語を使用するのではなく、敬語不使用の発話も使いながらコミュニケーションを円滑に図る工夫もあるからである。

以上、敬語の位置付けに関して考察してきたが、本稿では、従来の敬意表現としての敬語は B & L のストラテジーとは別のものであると結論する³⁾。前者は社会的関係を示す指標であり、後者は発話の内容の FTA 緩和としての手段である。しかし、敬語もポライトネス・ストラテジーも同じように社会規範が基になっており、ポライトであるかどうかという判断も多くの場合社会規範に基づいて行っている。一方、実際のコミュニケーションにおいては、その社会規範も、状況判断や人間関係によっては変化する可能性を持ち合わせ、その場におけるふさわしい発話であればポライトであると判断されることも多々あるという柔軟性も兼ね備えている。

また、敬語は、言語形式としての「材料」(lexicon とってもいい) と、それを実際に「敬意」を表す目的に使用する場合やスピーチレベルシフトに見られるように話者のなんらかの意図を表す目的に使用する場合に生ずる「語用論的意味」とを区別する必要がある。敬語という言葉が「うやまう」という意味を含んでいるために「敬語 = 敬意」という方程式に引きずられるために狭義的に考えたり、デフォルトと判断したりするのである。だから、素材である言語形式としての敬語をまず lexicon と見做し、次に敬語使用の場面を観察してそれを分析すると、敬語は様々な目的で使われ、ダイナミックな意味解釈も生み出すツールであることに気付く。

それでは、素材としての「敬語」はどのように使い分けされるのだろうか。また、その lexicon は場面ごとで個別に扱われるべきなのか、あるいは一見語用論的解釈は異なっても根底に共通の要素があるのだろうか。つまり、上下関係や親疎を表す敬意としての敬語は、スピーチレベルシフトに見られるような敬語 (という lexicon) とは区別すべきなの

3) スピーチレベルシフトの現象は、敬語をストラテジーとして利用する例であるが、このストラテジーには、B & L のポライトネス・ストラテジーと異なるものもある。前者は、話者の心理的意図を敬語という言葉形式を利用して表す「手段」として用いるという意味のストラテジーである。

であろうか。この疑問に答えるために、Symbolic Interactionism (SI) の role-identity という用語を適用して論じることにする。なお、発話のとりまく場面、状況、人間関係をまとめて「環境」という言葉で表すが、これは、SI では、the situation is defined (場面状況を明確にする) という (Hewitt & Shulman, 2011: 218)。我々はある場面に遭遇すると (例：大学での講義)、そこに存在するもの全て (教授に対して学生が居る、講義を受ける状況にある。また大学、講義室という場所、ホワイトボードなど) を一瞬にして認識し、その「環境」での自分の identity (例：講義を受ける学生) が決まる。その identity に応じてどのようにふるまうかを決定するのである (role-performances：例：講義を聴く、質問をする)。その performances のひとつが「敬語」の使用 (あるいは不使用) である。個々の人間は様々な identities を生み出す可能性を持っており、異なる identity がその performance において異なる敬語の解釈を引き起こすのである。

本稿では、敬語は社会的、あるいは心理的な距離を表す指標であると主張する。だから、敬意を表す敬語もスピーチレベルシフトに現れる敬語も「距離」を図った結果の言語表現であると判断する。違いは社会的に相手との距離を図るのか、話の流れの中で相手と心理的に距離を図るのか、という点であるが、identity つまり「相手にどのように自分を提示するのか」という過程は同じである。ただし、identity にも種類があり、様々な場面で異なる identity が生じ、それに応じた言動 (role-performance) を行うのである。

Ⅲ 敬語と SI における role-identities

1. SI の role-identities の分類

Identity という用語は、社会科学の様々な分野で使用されているが、SI においては、identity は、相互作用として生起するものであって、参加者が本来所有しているものではないと主張する。又、role という用語も identity と区別されており、identity が抽象的なシンボルとして個々の心中で生起するのに対して、role はその identity をどのように他者に対して言動に表すかという遂行、実行あるいは演技 (performance) を示す。例えば、「教師」という identity は社会的にも共通のイメージがあるが、それは我々が社会で育っていくうちに得た経験の上に成り立っている知識を共有しているからである。しかし、現実には、この「教師」という identity は、学校、生徒、教室、教壇という場面設定があり、そこで「教える」に至ってはじめて生起するのである⁴⁾。そして、教師の roles は、学校、地域、文化によって具体的な職務内容は多少異なるとはいえ、個人が「教師」として働く場所で具体的な行動として現れる。この行動は、実際の仕事も含むが、言語表現や非言語行動 (服装、ジェスチャー) なども含む。Role と identity は、多くの場面で同時

4) Identity は、“a situatedness of the person in terms of standing in the context of a particular social relationship or group” (Gecas and Burke, 1995: 45) と定義されている。相互作用によって生起し、認知されるのである。

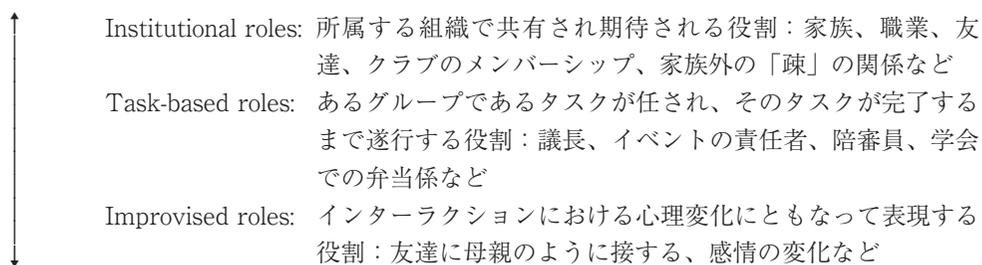
に生起するので、role-identity と一括した用語を使うことが多いが、この両者がいつも同質であるとは限らない。例えば、「教師」という identity を同じ学校の教師たちが共通に把握していても、実際の面で生徒を厳しく叱るのが教師の role と思っている人もいれば、生徒と同じ目線に立つのが role だと思っている人もいる。つまり、role-performance が顕著に異なるということもあり得るのである。

Role という用語は、「役割」と訳されるのが普通であるが、SI における「役割」はもっと広い意味に捉えられている。例えば、場面によっては「立場」「職務」「責任」「役割」「役目」「タスク」「自己主張」「イメージに沿った振る舞い」というように訳される。「自己主張」とは「自分がこのように振舞ってもいいのだ」と認識した role のことである。ある教授が誰を相手にしても傲慢な態度を取る場合、社会的に受け入れられなくとも、その人の心の中で認識している自分の role をそのまま行動に表していると説明できる。「イメージに沿った振る舞い」とは、自分がイメージする姿を言語形式に表すことを言う。上記の「教師」の生徒への接し方の例はその典型である。母親としての役割には共通面が多々あるにせよ、子供に対してどのようにふるまうのが「母親」であるのか、というイメージは個人によって微妙に異なる。

SI は、社会心理学の役割理論のひとつであるが、扱う対象が社会と個々の関係であるため、identity の分類は、人種、国籍、男女差という social identities と職種（医者、店員、教師など）や社会的地位（学生、客など）の role-identities に留まっている。この role-identities を、Obana (2012a, in press) では、さらに細分化して、何らかのタスクを任せられた Task-based role-identities（会議の議長、ゼミの学生がゼミ旅行のリーダー役を任される、友達が結婚披露宴で司会役をするなど）、会話中に母親のような気持ちで友達に接したり、皮肉な気持ちになったりする心理的变化である improvised role-identities を設定し、そのパフォーマンスが social identities に比べると時間的に短く個人的であるものを一括して、interactional role-identities と名付けている。これらを、会社や組織における職業などを含む Institutional role-identities として区別している。そして、

図 2

より社会的に決定される role-identities



より個々の心理状態によって決定される interactional role-identities

いわゆるスピーチレベルシフトは、improvised role-identities に分類されている。図2は role-identities をまとめたものである。図中の矢印は、role-identities の決定要因が社会的からより個人的・心理的にと移行する度合いを示している。

2. 敬語と role-identities: 社会的関係からスピーチレベルシフトまで

ここでは敬語に限定して SI の role-identities との関わりを考察する。まず、敬語の使用・不使用の決定には図2のどの role-identities も関与する。たとえば、所属している会社で Institutional role として相手より自分が下位であると認めた場合 (identity)、それを敬語に具現するのである (role-performance)。この敬語は従来の狭義的な意味での敬意表現としての敬語にあたる。ここで注意すべきは Institutional roles を相互作用で認めたとしてもそれが即敬語の使用につながるわけではないという点である。SI は、インタラクションが起こる「環境」(II-2 参照) を把握して、その各々の環境にふさわしいと判断した役割行動を取ると強調している。だから、まず相互作用が起こっている「環境」を把握し、さらにそこから Institutional roles を認識し、そして敬語使用が必要かどうかと判断してはじめて社会的な関係をしめす指標として敬語を使用するという段階を踏むのである。

Task-based roles というのは、例えば、所属する会社の会議で議長役を任されて、議長としての役割を遂行する際に敬語を使用する時、それは議長が複数の会議参加者に向かい合っているという一種の儀式的な「環境」(いわゆる「公共の場」) を把握しているからである。だから、親しい同僚には普段は敬語を使わなくとも、会議では使うのである。社長が社員に年頭の挨拶のスピーチで敬語を使うのも、同じく一時的な儀式的環境を把握して、そのタスクを遂行するには「距離」を取る必要があるからである。

次に Improvised roles という最も心理的な動機で最も短時間に表れる role (この場合は演技と訳す) について述べる。これは、インタラクション中に起きた何等かの心理的な変化を敬語という言語形式によって表したものである。親しい友達には敬語を使わないのが普通であっても、何か大きな手助けを受けて(経済的援助、病気の時の世話) 深い感謝の念を表す場合、「ほんとにどうもありがとうございました」と改まって発話することがあるが、心理的に少し距離を取ることで相手に改まりの態度を示しているのである。感謝はポジティブ・ストラテジーであるが、敬語使用によって相手を少し崇める(距離の一機能) ことで感謝の気持ちをより深く表す効果がある。

本稿では、スピーチレベルシフトの現象は、この Improvised roles のひとつであると主張する。本稿では敬語に焦点をあてているので、普通体(例：行く)から敬語体(いらっしゃいます)に変化するプラスレベルシフトに限定して考察する。このシフトの分析例として、Okamoto (2009) は、皮肉を表すことがあると述べ、Maynard (2004) では弱い立場にある人物が自分を守るために敬語使用を使うという例を挙げている。また Barke

(2011) は、抑制の効いた冷静さを示す例を提示している。これらは相手に心理的距離を取ることでそれぞれの role-performance を示していると言える。

一方、Cook (1996, 2008) は、プラスレベルシフトには acting on-stage、a public presentation mode of self という用語で、話者の公共的役割がさらに強調される意味合いがあると述べている。同じように Yoshida & Sakurai (2005) は、妻が夫に「ごはんができましたよ」とプラスレベルシフトを利用することで妻としての社会的アイデンティティを示していると論じている。これらは、前述の公共の場としての会議やセレモニーで普段敬語を使わない相手にも敬語を使用する Task-based role-identities と類似している。違いは、公共の場では敬語の使用が社会的に期待されており、しかもその公共の場が続く限り敬語は絶えず現れるという点である。また、この場合の敬語は社会的関係を示す敬意表現である。一方、上記の Cook や Yoshida & Sakurai らのプラスレベルシフトの例では、話者が個人のレベルで心理的に「公共的、社会的立場」を一時的に強調していると判断できる。しかしながら、このスピーチレベルシフトにおける「敬語」が敬意表現を表しているかどうかとなると賛否が分かれるところである。データをさらに収集し分析を深める必要がある領域である。

一方、スピーチレベルシフトに見られる敬語のなかには、明らかに敬意を示すと思われる例もある。前述の普段敬語を使わない相手である友達に「ありがとうございます」と礼を述べるのは、聞き手への敬意を表していると言える。また、Cook (2011) は、教授が学生に指導している場面で、普段は敬語を使わないのに助言や提案をするときにプラスレベルシフトを行う例を提示しているが、これも一種の敬意の表れであると筆者は考える。Cook は、これを上述と同じように公共の役割の強調として the speaker's institutional identity と呼び、このようなパフォーマンスによって、「聞き手に自分の社会的役割を積極的に提示している」(Cook, 2011: 3659 筆者訳) と結んでいるのだが、この分析は矛盾を生じることになる。何故なら、Cook は、教授が最初に普通体を使うのは、インタラクション全体を通じて上位者として振る舞わず学生の立場と同等になっている証拠⁵⁾であると述べている一方で、プラスレベルシフトは教授という社会的役割を強調していると主張しているからである (Cook, 2008: 19-21)。Cook の会話データでは、学生は敬語を使っているが、それは学生が「教授」という社会的地位を上位として認識していることを証している。しかも教授の指導の場面は教授としての社会的立場が最も顕著に認められる場面である。そのときにプラスレベルシフトを使用することによって、その上位的立場がさらに強調されるという Cook の解釈に従えば、基調として普通体を使用している目的(いわゆる同等意識)がここで一挙に崩れることになる。むしろこのスピーチレベルシフトに現れる敬語は、相手に配慮した結果として捉え、それが学生指導という行動がもたら

5) もちろん教授が学生に対して普通体を用いることで上位者であることを示すこともあり得るが、ここでは Cook のデータに基づき、また Cook の主張する同等意識に従って論じている。

す上からの目線の脅威を和らげるものであると解釈するほうが適切であろう。このような効果をもたらす敬語は、敬語の起源に由来しており、現代日本語においても認められる機能である。

浅田 (2001, 2005, 2014) は、古代語を分析することによって、敬語の起源は「祝詞」にあると結論した。即ち、祝詞を読み上げる儀式の場でよろずの神々に対して使う言葉が敬語の起源であるというのである。祝詞の儀式では、力のない人間が神々（自然）の猛威（自然災害）にひれ伏し、慎重にアプローチし、あるいは作物の豊作に感謝したり、願い事を祈請するのである。だから、敬語の起源は、神々への「畏怖」、「慎重さ」、「感謝」、「願望」を表すことにあると浅田は結論する。このアニミズム的祈禱が神道として発達すると、現人神である天皇およびその家族に敬語を適用するようになる。社会が複雑になると敬語使用はさらに拡張され、現代日本語では上下関係（地位、年齢差）、親疎関係、力関係を示すものとなっている。しかしながら、敬語の起源の一部である「感謝」「考慮」「慎重」という機能も現代日本語に存続している。例えば、前例の敬語を普段使わない友達に深い感謝の意を示すときに敬語を用いたり、慎重に情報を伝えるときにスピーチレベルをプラスシフトしたり（例：石崎（2000）の主張する「情報の重要度」はこれにあたる）、また、Cook（2008, 2011）の例に見られるように、普通体を基調として使用する教授が、学生指導の場面になるとプラスシフトを使うのも、学生への考慮、慎重さを示すものと判断する。これはスピーチレベルシフトの中でも敬語の元々の機能を生かした現象であるといえる。この場合は、敬意を表すスピーチレベルシフトであると判断してもよいだろう。

以上のように、スピーチレベルシフトに見られる敬語の使用は、従来の社会的関係を示す敬意表現としての「敬語」とは一見異なるように扱われてきたが、社会的か心理的かという動機の違いはあるにしても、共通点も見られることが分かる。即ち、敬語の基本機能としての「距離」である。そしてその距離が状況によって、社会関係（上下関係、親疎関係）を示すものであったり、公共の場としての認識（会議や儀式的な場）であったり、あるいはスピーチレベルシフトに見られるような「改まり」、「感謝」、「慎重」、「考慮」といった話者の心理を反映する現象であったりするるのである。しかもスピーチレベルシフトの中には、話者の心理が敬語の起源に由来しているものもある。そうすると、スピーチレベルシフトに現れる「敬語」は必ずしも従来の敬意表現としての「敬語」の世界から逸脱した部類のものではないことが分かる。

上記をSIの見解から言うと、まず話者は自分の置かれた「環境」を判断してあるidentityを決定する。そのidentityがInstitutional（職業など）なのか、Task-based（会議など）なのか、あるいはinteractionalなのか、によってそれぞれのrole-performanceを言動に表す。その言動のひとつである敬語が「社会的関係」を示すものであったり、「公共の場、儀式的な場」を表すものであったり、また会話のある時点で一時的であれ心理的

に立場を強調したり（妻の立場など）感謝や考慮を示したりするのである。

すると、図2に表した社会的から心理的に至る一連の identities は、敬語という言語形式の持つ機能が identities の種類によって異なるとはいえ、スピーチレベルシフトが特に従来の「敬語」と異なる領域にあるのではないことが分かる。まず、identity という自己の決定が共通してあること、次にどのような目的で敬語を使用してもその根本の動機は「距離」であること、そしてそれぞれの場面における敬語の機能は一見多様に見えるがそれらは全て敬語の起源から発しているのであって、敬語という言語形式にその起源から逸脱した機能があるわけではないこと、などが理由として挙げられる。

IV おわりに

本稿では「敬語」の再・再考を目的として敬語の持つ特質について論じてきた。ポライトネス研究においてこれまで30年の間に「敬語」の扱いは二転三転と変化してきた。本稿ではそれらの研究を基に、「敬語」の根本を問い、敬語はポライトネス・ストラテジーのひとつかどうかを検討し、さらに、従来の敬意表現である「敬語」とスピーチレベルシフトに見られる「敬語」とは異なるカテゴリーに属する現象なのか、という点を明らかにすることを試みた。

従来の敬意表現としての「敬語」は、B & Lのポライトネス・ストラテジーとは異なると結論する。前者は話し手と聞き手の社会的関係を示す指標であり、後者は伝える内容がFTAをもたらすと判断された場合そのFTAの軽減策としての手段だからである。だから、発話の内容にFTAの可能性があってもなくても、敬語の生起に影響を与えることはない。

また、スピーチレベルシフトに現れる（プラスシフト）「敬語」は、従来の敬意表現としての「敬語」に「距離の指標」という面でつながっていることが明らかとなった。従来の敬語が社会的関係を示す指標であり、それは社会的距離を言葉で具現したものである。一方プラスシフトに見られる「敬語」は、個人の心理的距離を具現したものである。その中には敬意を表すシフトもあれば、個人の社会的、公共的立場を強調するという手段としてのシフトもあるが、シフト現象に見られる敬語は、敬意表現としての敬語とまったく異なる言語現象ではなく、敬語の起源に集約されるものであるという点も明らかにした。

参考文献

- 浅田秀子 (2001). 敬語で解く日本の平等・不平等. 講談社現代新書.
 浅田秀子 (2005). 「敬語」論—ウタから敬語へ. 勉誠出版.
 浅田秀子 (2014). 敬語の原理及び発展の研究. 東京堂出版.
 Barke, Andrew (2011). Situated functions of addressee honorifics in Japanese television drama. In B.

- L. Davies, M. Haugh & A.J. Merrison (eds.), *Situated Politeness*, London: Continuum International Publishing Co., pp. 111-128.
- Baumann, Michael, Brennan, Geoffrey, Goodin, Robert E. and Southwood, Nicholas (2010). Introduction. In Baumann, M., Brennan, G., Goodin, R.E. and Southwood, N. (eds.), *Norms and Values — The role of social norms as instruments of value realisation*. Munich: Nomos, pp. 7-15.
- Bicchieri, Cristina (2006). *The Grammar of Society — The Nature and Dynamics of Social Norms*. New York: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen (1978). Universals in language usage: politeness phenomena. In Esther Goody (ed.), *Questions and Politeness*, Cambridge: Cambridge University Press, 56-311.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 因 京子 (2005). 「日本語のポライトネス：その制度的側面と語用論側面」. 九州大学韓日言語文化研究 6, 35-66.
- Cook, Minegishi Haruko (1996a). Japanese language socialization: indexing the modes of self. *Discourse Processes* 22: 171-197.
- Cook, Minegishi Haruko (1996b). The use of addressee honorifics in Japanese elementary school classrooms. In N. Akatsuka, S. Iwasaki & S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 5. Stanford: CSLI Publications, pp. 67-81.
- Cook, Minegishi Haruko (1997). The role of the Japanese *masu* form in caregiver-child conversation. *Journal of Pragmatics* 28: 695-718.
- Cook, Minegishi Haruko (2008). Style shifts in Japanese academic consultations. In K. Jones & T. Ono (eds.), *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 9-38.
- Cook, Minegishi Haruko (2011). Are honorifics polite? Uses of referent honorifics in a Japanese committee meeting. *Journal of Pragmatics* 43: 3655-3672.
- Eelen, Gino (2001). *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome.
- Fukuda, Atsushi and Asato, Noriko (2004). Universal politeness theory: application to the use of Japanese honorifics. *Journal of Pragmatics*, 11, 131-146.
- Gecas, Viktor and Burke, J. Peter (1995). Self and identity. In K. S. Cook, G. A. Fine & J. S. House (eds.), *Sociological Perspectives on Social Psychology*, Boston: Allyn & Bacon, pp. 41-67.
- Geyer, Naomi (2008). Interpersonal functions of style shift: The use of plain and masu forms in faculty meetings. In K. Jones & T. Ono, (eds.), *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 39-70.
- Hewitt, P. John and Shulman, David (2011). *Self and Society — A Symbolic Interactionist Social Psychology* (eleventh edition, originally published in 2003). Boston: Pearson Education, Inc.
- Ide, Sachiko (1989). Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 2: 223-248.
- Ikuta, Shoko (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Science* 5: 37-53.
- 石崎晶子 (2000). 「電話連絡の会話におけるスピーチレベルシフト」. 言語文化と日本語教育. お茶の水女子大学, 62-74.
- Jones, Kimberly and Ono, Tsuyoshi (eds.) (2008). *Style Shifting in Japanese*. Amsterdam: John

Benjamins Publishing Company.

- 熊井浩子 (2009) 「日本語の Politeness と対人行動に関する一考察」静岡大学国際交流センター紀要第 3 号, 1-26.
- Locher, Miriam and Watts, Richard J. (eds.) (2005). Politeness theory and relational work. *Journal of Politeness Research* 1 (1), 9-34.
- Makino, Seiichi (2002). When does communication turn mentally inward?: A case study of Japanese formal-to-informal switching. In N.M. Akatsuka & S. Strauss (eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 10, California: CSLI Publications, pp. 121-135.
- Matsumoto, Yoshiko (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- メイナード, K. 泉子 (2001). 恋するふたりの感情言葉：ドラマ表現の分析と日本語論. 東京：くろしお出版.
- メイナード, K. 泉子 (2004). 談話言語学. 東京：くろしお出版.
- Mills, Sarah (2011). Discursive approaches to politeness and impoliteness. In Linguistic Politeness Research Group (eds.), *Discursive Approaches to Politeness*. Berlin/New York: De Gruyter Mouton, 19-56.
- 森山由紀子 (2010) 「現代日本語の敬語の機能とポライトネス—『上下』の素材敬語と『距離』の聞き手敬語」. 同志社女子大学 日本語日本文学 22 号, 1-19.
- 日本社会心理学会 (編) (2012). 社会心理事典. 丸善出版 (第 4 版).
- Obana, Yasuko (2012a) Politeness as role-identity-application of Symbolic Interactionism. 関西学院大学言語教育研究センター紀要, 言語と文化, 第 15 号, 1-16.
- Obana, Yasuko (2012b) Re-examination of yoroshikuonegaishimasu — The routine formula as the linguistic implementation of one's tachiba-role. *Journal of Pragmatics*, 44: 1535-1548.
- Obana, Yasuko (in press). Speech level shifts in Japanese: A different perspective — The application of Symbolic Interactionism. *Pragmatics*.
- Okamoto Shigeko (1999). Situated politeness: manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversation. *Pragmatics*, 9: 51-74.
- Okamoto, Shigeko (2009). Politeness and perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17: 119-139.
- Pizziconi, Barbara (2003). Re-examining politeness, face and the Japanese language. *Journal of Pragmatics*, 35, 1471-1506.
- Pizziconi, Barbara (2011). Honorifics: The cultural specificity of a universal mechanism in Japanese. In Dániel Z. Kádár and Sara Mills (eds.) *Politeness in East Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 45-70.
- Saito, Junko (2010). Subordinates' use of Japanese plain forms: An examination of superior-subordinate interactions in the workplace. *Journal of Pragmatics*, 42, 3271-3282.
- 滝浦真人 (2005) 日本の敬語論. 大修館.
- 滝浦真人 (2008) ポライトネス入門. 研究社.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「ディスコース・ポライトネスという観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること」. 語学研究所論集 6. 東京外国語大学, 1-29.

Watts, Richard J. (2003). *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Yoshida, Mayumi and Sakurai, Chikako (2005). Japanese honorifics as a marker of sociocultural identity. In R. T. Lakoff & S. Ide (eds.), *Broadening the Horizon of Linguistic Politeness*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp. 197-215.

日本語の敬語再・再考：役割アイデンティティの観点から

尾 鼻 靖 子

ポライトネス研究においてこれまで30年余りの間、「敬語」について様々な議論がなされてきた。Brown & Levinson (1978, 1987: 以下 B & L) が日本語の敬語はネガティブ・ストラテジーであると主張して以来、敬語の捉え方が二転三転と変化を遂げてきた。まず、Ide (1989), Matsumoto (1988) らは、B & L に反論して、敬語は、B & L の主張するような意思選択できるストラテジーではなく、社会規範であり、義務が課された言語体系であると主張した。しかし一方で B & L を支持する立場も現れた (Fukuda & Asato, 2004; 熊井, 2009; 森山, 2010; Pizziconi, 2003, 2011; 滝浦, 2005, 2008; 宇佐美, 2001 など)。さらに、スピーチレベルシフトを研究する立場から、Ide や Matsumoto の「敬語」は静的で教義的であるとし、敬語は同じ会話内でダイナミックに使用、不使用という変化を見せるものであり、また必ずしも「敬意を表す」従来の敬語の解釈に従う現象ではないという主張も現れた (Barke, 2011; Cook, 1996a, b, 1997, 2008, 2011; Geyer, 2008; Ikuta, 1983; Ishizaki, 2000; Jones & Ono, 2008; Makino, 2002; Maynard, 2001, 2004; Okamoto, 1999, 2009; Saito, 2010 など)。

本稿ではこれまでの先行研究を再度検討し、敬語はストラテジーなのか、敬語使用決定の根本は何なのか、そして、従来の敬意を表す敬語はスピーチレベルシフトに見られる敬語とは別の種類のものなのかを考察する。これらを明らかにするために理論の背景としてシンボリック相互作用理論 (Symbolic Interactionism) における役割アイデンティティを適用する。